

Case 16-2007: A 61-Year-Old Man with a Mediastinal Mass

(Volume 356; 21)

縦隔腫瘍のある61歳の男性

【症例】61歳 男性

【主訴】胸痛

【現病歴】6週間前、突然の左前胸部痛を自覚した。痛みは深呼吸時に増悪した。近医の救急外来にて胸部 CT が撮影され、肺塞栓はみられなかった。ところが、左前縦隔に直径4cmの分葉状の軟部腫瘍が発見された (Figure1)。体幹および左肺動脈に接しており、心膜と連続していた。リンパ節腫大はなく、肺野はクリアーであった。検査ののち、胸部外科に入院となった。

全身の PET 検査では胸部腫瘍の部位に一致して取り込みが高値であった。骨転移は認められなかった。呼吸機能検査にて、FEV1.0% 56%, %FVC 59%と混合型呼吸障害を認めた。発症後1ヶ月の気管支鏡検査では、気道内病変は認められなかった。胸腔鏡にて縦隔リンパ節生検を行ったところ悪性所見はなかった。腫瘍は境界不明瞭であり、心膜に浸潤していた。更なる加療のため当院に転院となった。

【既往歴】肥満、高血圧、高脂血症、副甲状腺機能亢進症に対する副甲状腺摘出術、ライム病、ギランバレー症候群。重症筋無力症や赤芽球癆、低 γ グロブリン血症の既往はなし。

【生活歴】職業：大学教授、現在は退職。有害物質への暴露や特記すべき渡航歴なし。

【服薬】Lisinopril, simvastatin, gabapentin。

【入院時現症】

[バイタル]BMI=37と著名な肥満。[頭頸部]頸静脈虚脱なし。頸部・鎖骨上リンパ節は触知しない。[胸部]呼吸音・心音とも正常。肋骨や胸骨の触診では疼痛なし。

【家族歴】特記事項なし。

【入院後経過】胸痛はまもなく軽快し、咳漱、呼吸困難、喀痰、発熱、筋力低下などの症状はみられなかった。

ここである診断的検査が行われた。

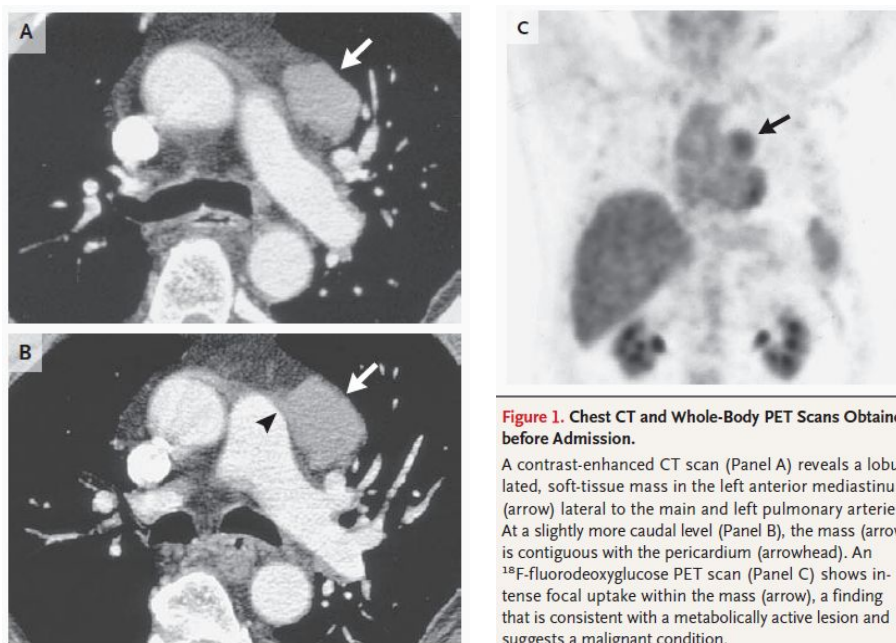


Figure 1. Chest CT and Whole-Body PET Scans Obtained before Admission.

A contrast-enhanced CT scan (Panel A) reveals a lobulated, soft-tissue mass in the left anterior mediastinum (arrow) lateral to the main and left pulmonary arteries. At a slightly more caudal level (Panel B), the mass (arrow) is contiguous with the pericardium (arrowhead). An 18 F-fluorodeoxyglucose PET scan (Panel C) shows intense focal uptake within the mass (arrow), a finding that is consistent with a metabolically active lesion and suggests a malignant condition.